

おう ちょう
小房町

昔は川に行き交う小船

四分村（四分町）の小字が独立して小房村（おうさむら）となったのは、江戸時代末期の嘉永、安政年間（一八四八―五九）のころです。

小房村が生まれる約二〇〇年前の慶安三（一六五〇）年、同地の小房観音寺本尊を「比叡山から移した」記録が残っています。すでに仏像を祭る祠（ほこら）があったのでしよう。同じく大願寺「永代経寄付芳名録」を見ますと、享保年間（一七一六―三五）の芳名記録は、寄付人が少なく記入年代も、とびとび。記入年代が連なってくる文化、文政年間（一八〇四―二九）の記録から類推しますと、約四〇軒ほどの家が独立当時の村にあったようです。

村は、北の街道宿場・八木村と南の畝傍や吉野方面をつなぐ、道筋に沿って栄えました。幕末、元治元（一八六四）年前後の記録では、村の戸数が「三百軒近くに達した」とあります。現小房町の町並みがほぼ成り立っていたのでしよう。

明治維新のころには、町を流れる飛鳥川に小船が行き交い、アユ漁も行われていたといえます。